

## 第4節 ムラの空間構成の変容（１） ：高松市川島校区を事例に

内田 忠賢

### 1 問題の所在

地域社会は多種多様な地縁的組織で構成されている。まして村落社会（ムラ）であれば、それらの組織が比較的強固に機能し、あるいは残存していることは言うまでもない。それら地縁的組織が空間レベルに反映した結果のひとつが、一定の範囲を指す呼称（地名）である。また地域社会の構成員が土地を分節的に認識した結果も、同様に一定の範囲を示す呼称（地名）として現れてくる。そしてムラの場合、土地との密着度が高いので、なおさらである。つまり、このようにムラでの地縁的組織や空間認識の様子は、地名とそれが指示する範囲やその分布に反映している。したがって、その組織や認識のメルクマールにより、何種類もの分布（領域）図を描くことができる。逆に言えば、ムラ空間の特徴の一端が、多種類の分布図（領域図）の重層関係から考察できる可能性がある。そこで本報告では、特定のムラ空間をフィールドに、いくつかのメルクマールによる分布図を作成し、比較・検討することを始めたい。それにより、この地区の村落の特徴を考えてみたい。その際、メルクマールになるべき事象が、どの時期をベースにしているかを考慮することで、複数の分布図を時間軸に沿って並べ、ムラの空間構成の歴史的な変容過程・重層関係をも考えることができるのである。

ところで本報告を含む報告書全体、また調査・研究プロジェクト全体は、高松平野中心部の「弘福寺領讃岐国山田郡田図」比定地区周辺（以下「比定地区」と略）の歴史環境に関する総合調査である<sup>(1)</sup>。一方、本報告が対象とする地区は、「比定地区」以外の場所（その東南隣に位置する）であるので、調査全体と本報告の関係を説明する必要がある。

まず、現在の「比定地区」付近のムラが、高松平野の伝統的なムラの姿をどれほど伝えているのか、あるいは、どれほど変貌したかを知らなければならない。そのためには「比定地区」と比較するフィールドを求めなければならない。「比定地区」では都市化の影響が比較的大きく、景観的な市街地や住民の混住化が著しいからである。そこで、「比定地区」のムラを相対化するため、「比定地区」の近隣で、都市化の影響が比較的少ない地区を調査・研究する必要性が生じる。本報告で「変化」「重層」がキーワードになるのも、そのためである。

次に高松平野の、さらには讃岐のムラ研究に結びつける必要がある。極端に言えば、「比定地区」は、古代以来の先進地域、高松平野のごく一部なのである。運良く、「比定地区」の古地図だけが残ったにすぎない。したがって、視点を高松平野、讃岐平野全体に広げることも必要だろう。このテーマでプロジェクトのメインとなる古代まで直接、時代をつなぐことは困難かもしれない。しかし、少なくとも近世のムラの特徴を把握して、古代のムラ研究に近付けねばならない。

また本報告は、意外に蓄積のない讃岐農村研究の欠を補う、ケーススタディとなることを目標にしている。讃岐の農村研究に関して、民俗事例の収集があるものの、分析的な研究は非常に少ない。管見の限りでは、経済史に関するものが若干あるほかは、空間レベルでの把握を試みた石原潤の論文を挙げるにすぎない<sup>(2)</sup>。石原も指摘するように、近世文書を始めとする残存史料の少なさがネックになっている。むろん高松平野の農村についても同じ状況である。このような場合、現在、入手できる資料を、様々な視点で検討しなければならない。

前述のように、本報告では高松平野の1地区を事例に、時間軸をも射程に入れて、ムラの複数の空間構成を提示し、さらに比較・検討することを目的としている。また、ムラの姿を過去へと遡る作業

の手がかりを得たいと考えている。具体的には、まず4種類の分布（領域）図、すなわち小字、現在の自治会、昭和20年の集落（と小地名）、現在の地神の祭祀単位（メンバ）の各分布図を作成・提示する。次に、それらの資料から近世後期の「免」復原図を作成し、以上5種類の分布図を資料として提示する。そして、それらを時間軸に沿って並べ、比較し、分布（領域）の特徴を考え、ムラ空間把握の手がかりとしたい。

## 2 分布（領域）図の作成（1）

ここでは対象地区の空間領域を示す資料（分布図）を作成・提示する。主な対象は高松市川島校区である。川島校区は、正確には高松市立川島小学校区であり、高松市役所山田支所が直接に管轄する地区となっている。歴史的には大正11（1922）年～昭和28（1953）年の、ほぼ山田郡川島町の範囲である。（それに旧・池田村の一部が加わる）。川島校区をめぐる近世後期以降の行政区分の変遷は表5に示した。藩政村の中心は坂元・高野・上田井の3村である。なお、ベースマップは高松市発行の1/10,000都市計画図（最終的には、その縮小図）である。

表5 対象地区の行政区分変遷

	明治23(1890)	大正11(1922)	昭和28(1953)	昭和41(1966)
(山田郡)	坂元村 / 坂ノ上村 /	川島町坂元 /	山田町大字坂元 /	(高松市) 川島東町
	高野村 /	〃 高野 /	〃 高野 /	〃 川島町
	上田井村 /	〃 上田井 /	〃 上田井 /	〃 由良町
	池田村 /	池田村 /	西植田村の一部 /	山田町の一部 /
				〃 池田町

### a 小字の分布（第29図）

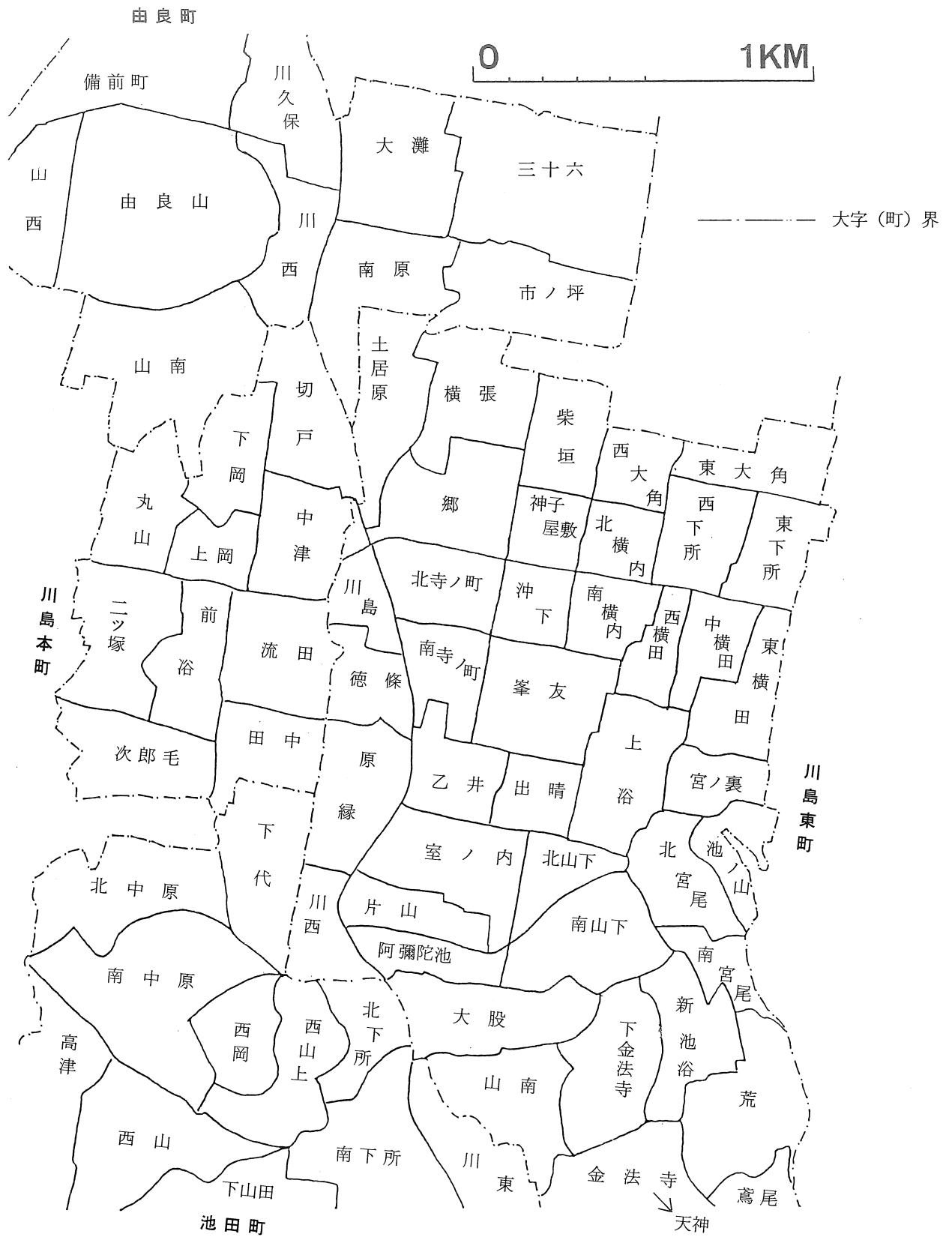
地名の比定などには、近世から現代まで続いた小字名とその分布がもっとも役に立つ。ここでは高松市作成の最新の『小字分布図』（平成元年）を、川島校区についてのみ再トレースした。この地図の小字名は、結果的であるが近世後期の『東讃郡村免名録』（以下、『免名録』と略す）記載の地名と重複するケースが多い。一般的な小字の成立過程から判断して、少なくとも近代までには定着したものと、大まかに考えられる。ちなみに讃岐の藩政村が大規模であるのは有名だが（全国的には大字＝藩政村が一般的）、讃岐の小字も他地方の「大字」から「字」程度の広い範囲に対応している。

### b 自治会の分布図（第30図）

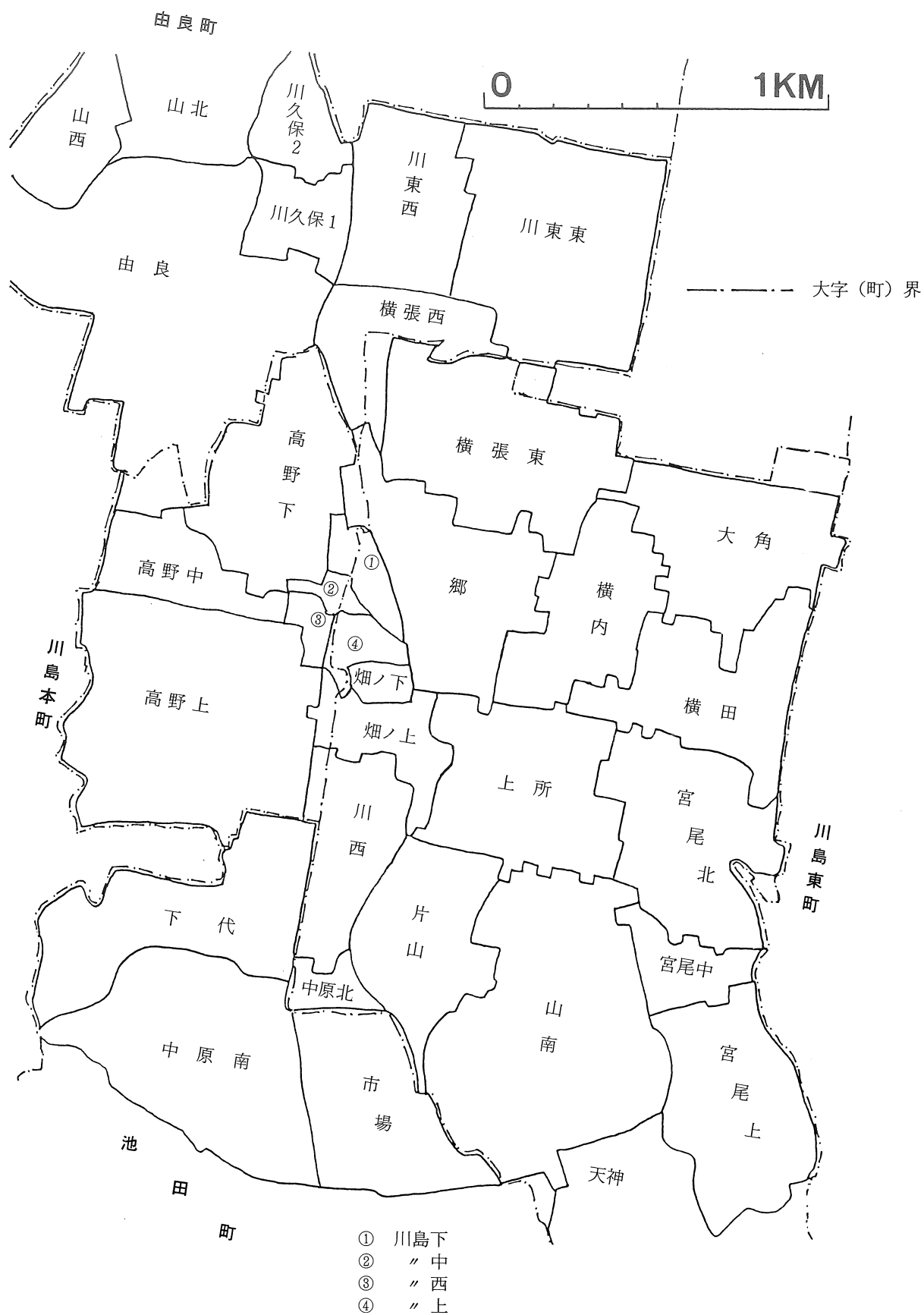
高松市役所山田支所が把握する自治会資料より作成した。資料の時期は平成2（1990）年ころの状況である。なお原資料には、新興の団地単位の自治会も記入されていたが、それは本報告の主旨から除外してある。また自治会の性格は、地縁組織であるが、基本的に戸の集合（属人・属戸）である。自治会の範囲は土地の区分（属地）ではないので、各自治会の境界は正確に線引きできない。したがって各自治会の範囲は、必ずしも隣接する必要がないが、第30図では便宜上、隣接するように線引きした。

### c 昭和20年の集落分布（第31-2図）

東原岩男（監修）『川島郷土誌』記載の「昭和20年ごろの川島校区の散村・街村」（図26-1）および「終戦当時の集落名・小字名・戸数」（表6）を参考に、小字名（第29図）などと対照しながら、



第29図 小字の分布



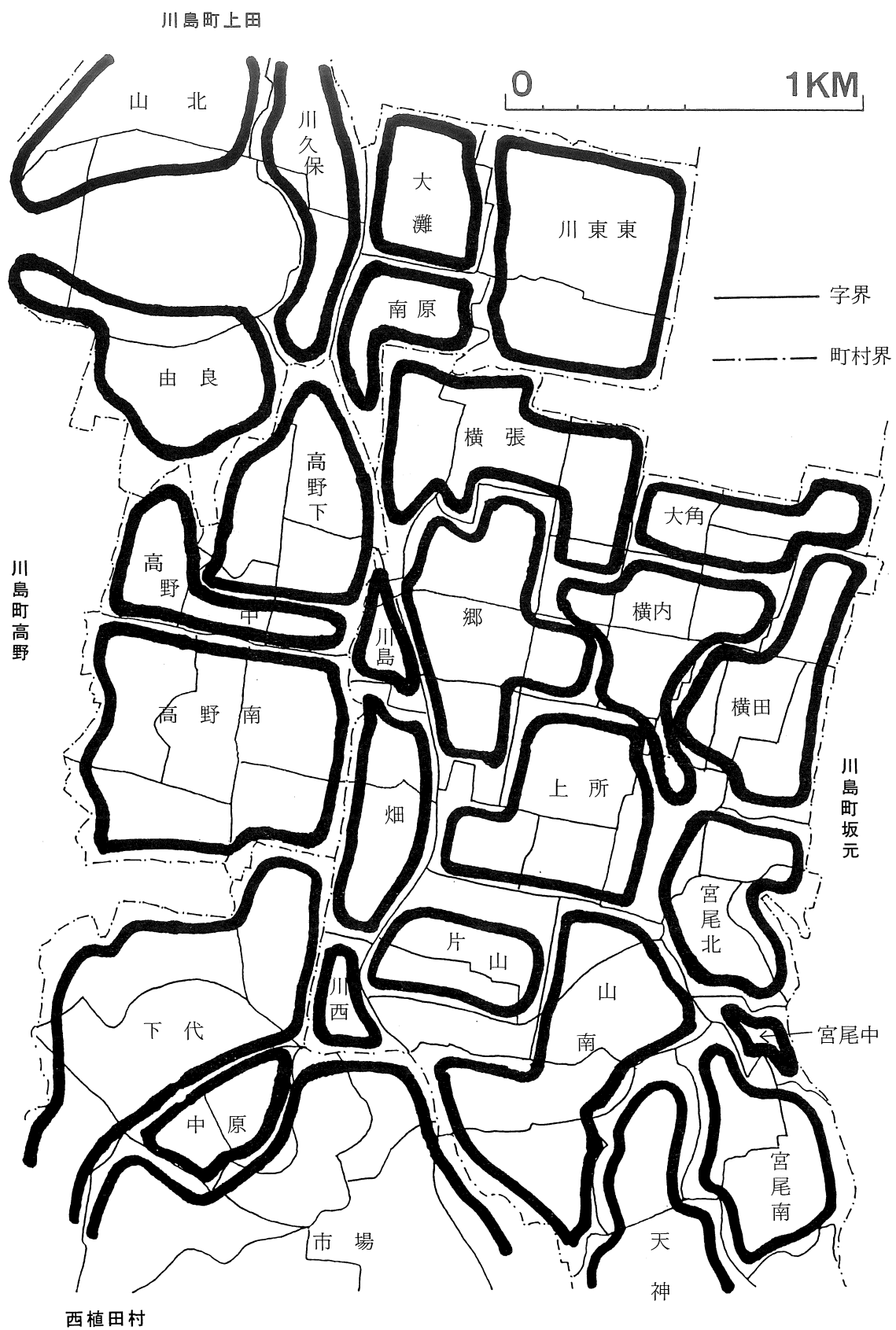
第30図 自治会の分布図



町元 東 坂 島 川 (旧)														現町名	
横張	郷	横内	横田	大角	宮尾北	宮尾中	宮尾南	上所	天神	山南	片山	川島	畑	川西	集落名
横張・土居原・柴垣・神子屋敷(一部)	郷・南房ノ町・北房ノ町・沖下	北横内・南横内・神子屋敷・上浴(一部)・横張(一部)	西横田・中横田・東横田・東下所	西大角・東大角・西下所(一部)	北宮尾・宮ノ裏・池ノ山・上浴(一部)	南宮尾	荒・新池浴	乙井・峯友・出晴・上浴(一部)	金法寺・天神	南山下・北山下・大股・山南	片山・室ノ内(一部)	川島・中津(一部)	徳条・原縁	川西・田中(一部)	小 字 名
三四	二四	二四	二三	二三	一四	一六	一五	三三	一二	三〇	一九	一二	一四	一三	戸数 農家
町良 由 (旧 上 田 井)														現町名	
池田町 (旧池田)			川島本町 (旧高野)											集落名	
下代	中原	市場	高野南	高野中	高野下	由良	山北	川久保	大灘	南原	川東東	小 字 名			
北中原・南中原(一部)・高津・下代	西岡(一部)・南中原(一部)	西山・上・西岡(一部)・西山・北上所(一部)	二ツ塚・前浴・次郎毛・流田・田中	丸山・上岡(一部)・中津(一部)	切戸・下岡・上岡(一部)・中津(一部)	山南・山西(一部)	備前町・山西(一部)	川久保・川西	大灘	南原	三十六・市ノ坪	戸数 農家			
二八	五五	三三	二二	三一	二五	四〇	四〇	一五	八	二四	二四	戸数 農家			

表6 終戦当時の集落名・小字名・戸数

(『川島郷土誌』545頁)



第31-2図 昭和20年頃の集落

昭和20年頃の集落分布図を作成した<sup>(3)</sup>。(現在の小字と終戦当時の小字を区別するため、後者を“小字”と表現する)。当時の集落名・“小字名”はほぼ現在の小字名・地神の祭祠単位名・自治会名に残っている。また、この時期の集落の分布は、大正11(1922)年の常会(自治会の前身)の分布と、地名に限れば、ほぼ同じである<sup>(4)</sup>。ちなみに坂元の郷集落の“小字”、南・北「寿の町(じゅのまち)」は、現在の小字の南・北「寺の町(じのまち)」に対応する。

#### d メンバ(地神祭の組織)の分布図(第32図)

メンバ(免場)は、地元で部落・集落とも呼ばれる地域社会の単位(地縁的な社会集団)である。その機能も現在では、地区の氏神・神社の祭祠関係のまとまり程度になっているが、かつては村落結合の大部分が、この社会集団に負っていたと言われる。葬式組(同行)も小規模のメンバではメンバ=同行であり、大規模なメンバではメンバを分割した単位が同行であった。本報告では近世後期の免や過去の免場と区別するため、現在の社会集団についてメンバと表現する。地神及び地神祭についての説明は、註ならびに参考文献にゆずり、本文では省略する<sup>(5)</sup>。

さてメンバの分布図作成に際しては、松宇神社の宮司さんから聞き取った内容をもとにした。この宮司さんは、川島校区の大部分の地神祭(社日さん)に、祭司(オタイさん)として参加する。各メンバは、地神祭をはじめとする松宇神社の氏子圏なのである。メンバの画定に際しては、各メンバでの聞き取りで一部、再確認した。

ここで第30図について2点確認したい。まず、メンバの線引きは大まかにならざるを得ないことである。なぜなら、メンバの結合契機は地縁であるものの、自治会と同じく戸の集合である。そして、さらに現在では新住民の多くがメンバに加入せず、大まかなメンバの範囲内にも、メンバの構成員以外の住民が存在するからである。しかし第30図では、聞き取り内容に従い、メンバの境界は隣接するように表現した。次に、川島校区のメンバ全部を対象にしないことである。先に「川島校区の大部分」と表現したのは、そのためである。あくまでも松宇神社の宮司がカバーする範囲、いわゆる氏子圏に限定する。ここの氏子圏は、北東は川島校区以外の小村町(旧・小村)の一部まで含む。一方、校区内の、北西の由良町(旧・上田井村)のほぼ全域と南西の池田町(旧・池田村)の一部は氏子圏ではない。現宮司さんのお話によれば、この氏子圏は、少なくとも1世代前(彼の父親)が現役のころから変化はない。

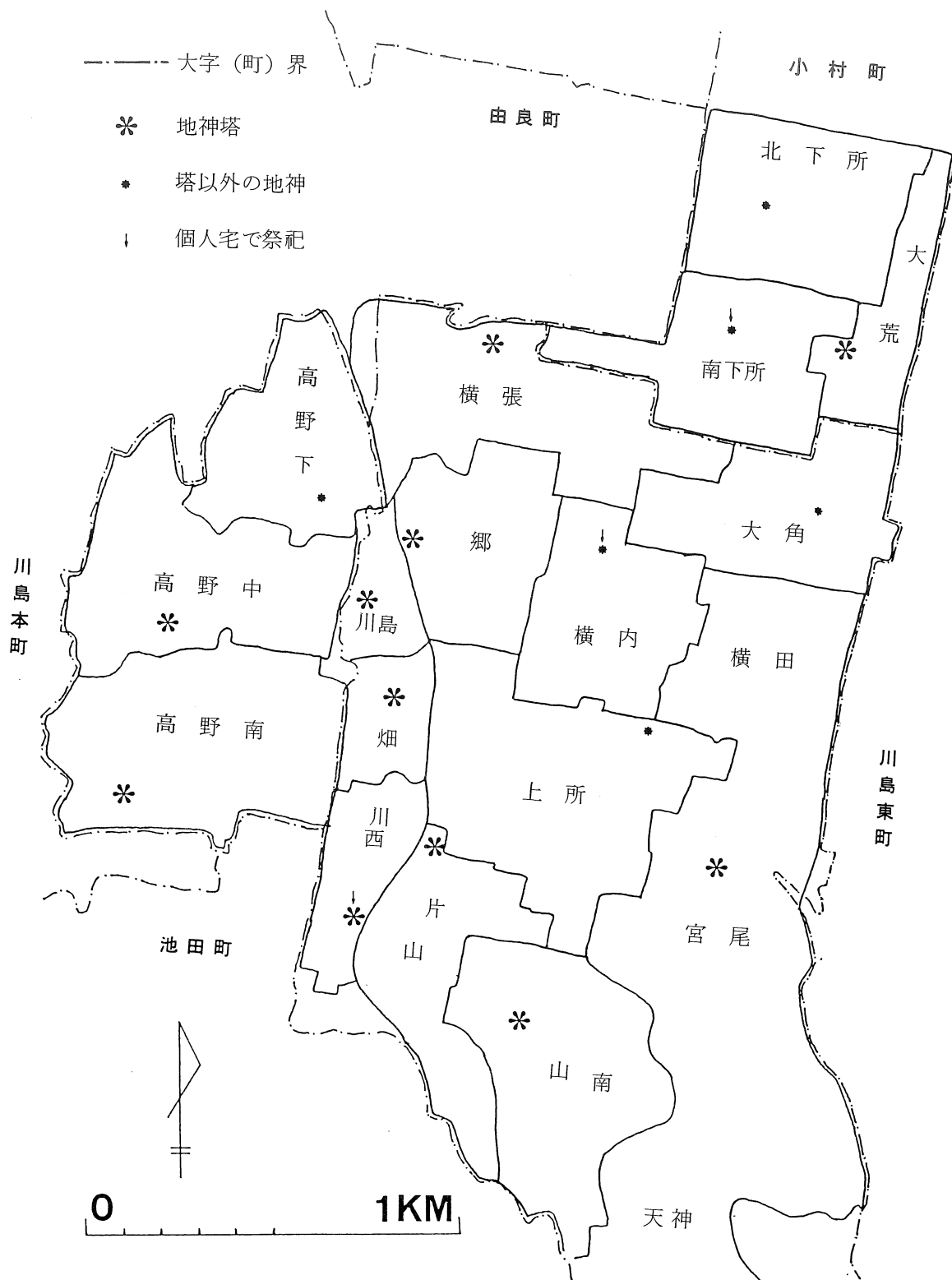
### 3 分布(領域)図の作成(2):近世後期の免の復原

次に、讃岐の村落の空間領域を考える際に、かつての免の復原を行う必要がある。免は近世期の貢租の単位地区であるといわれる。そして免の範囲の中心となった社会集団(集落あるいは戸の集合)が免場であると考えられている。つまり免と免場はある程度、対応関係にあると思われる<sup>(6)</sup>。そして近世後期の免場は、現在の村落のベースになったというのが定説である。したがって、この時期の免を復原する必要がある。旧・高松藩領の、この地区の近世後期の免場を考える場合、基本史料はやはり『免名録』である。

山田郡の坂元・高野・上田井の3村に関し『免名録』には次のように記されている。

坂元村	上所免	片山	上さこ	出晴
	宮西免	池内		
	山南免	打越	坂瀬	天神 東原 鷲ヶ尾
	池下免	横田		





第32図 メンバの分布

	沖上免	横張	柴垣
	郷村免	宗友	
	郷免	横手	
	水入免	川島	徳条 川西
	下所免	大角	
高野村	岡田免	善光寺	九ノ宮 岡 赤池
	上所免	前さこ	早神
	中所免	流田	
	下所免	切戸	溝川
上田井村	中所免	舛形	南原
	下所免	大灘	三十六 由良
	川西免	川窪	
	備前町免	備前町	鎌倉 禅門
	山南免	切戸	池内 室田

『免名録』の記載形式の点で、山田郡は西の香川郡と違い、免名の後にその免の範囲に含まれる小地名を記している。したがって免の復原には、免名だけでなく小地名も復原の手がかりになる。川島校区の範囲の免も、これらと、前章で提示した4分布図、特に小字名の分布図との対照作業を行う。後でも述べるが、小地名に関しては、現在の自治会名、現在のメンバ名は必ずしも参考にならない場合がある。また昭和20年の集落名・“小字”名資料は、集落の位置関係や地名を確認する際、参考になる。以下、旧村別に復原の作業プロセスを示していく。

#### a 坂元村

上所免では小字名として「上所」がないが、3小地名がそのまま小字「片山」「上浴（かみさこ）」「出晴」として残っている。一方、自治会名・メンバ名では「上所」「片山」が伝えられる。

宮西免・池内は地名として残っていない。

山南免では「山南」が小字名・自治会名・メンバ名として残る。また2小地名が小字「天神」「鳶ヶ尾」（地図の左下、範囲外）に伝わる。

池下免では「池下」という地名は伝えられないものの、小地名「横田」が小字「東横田」「中横田」「西横田」として、また自治会名・メンバ名の「横田」として残る。いずれもほぼ同じ範囲である。

沖上免では「沖上」は伝えられないが、小地名「横張」が小字名・自治会名・メンバ名として伝えられ、小地名「柴垣」は小字名として残る。これらは、ほぼ同じ範囲を示している。

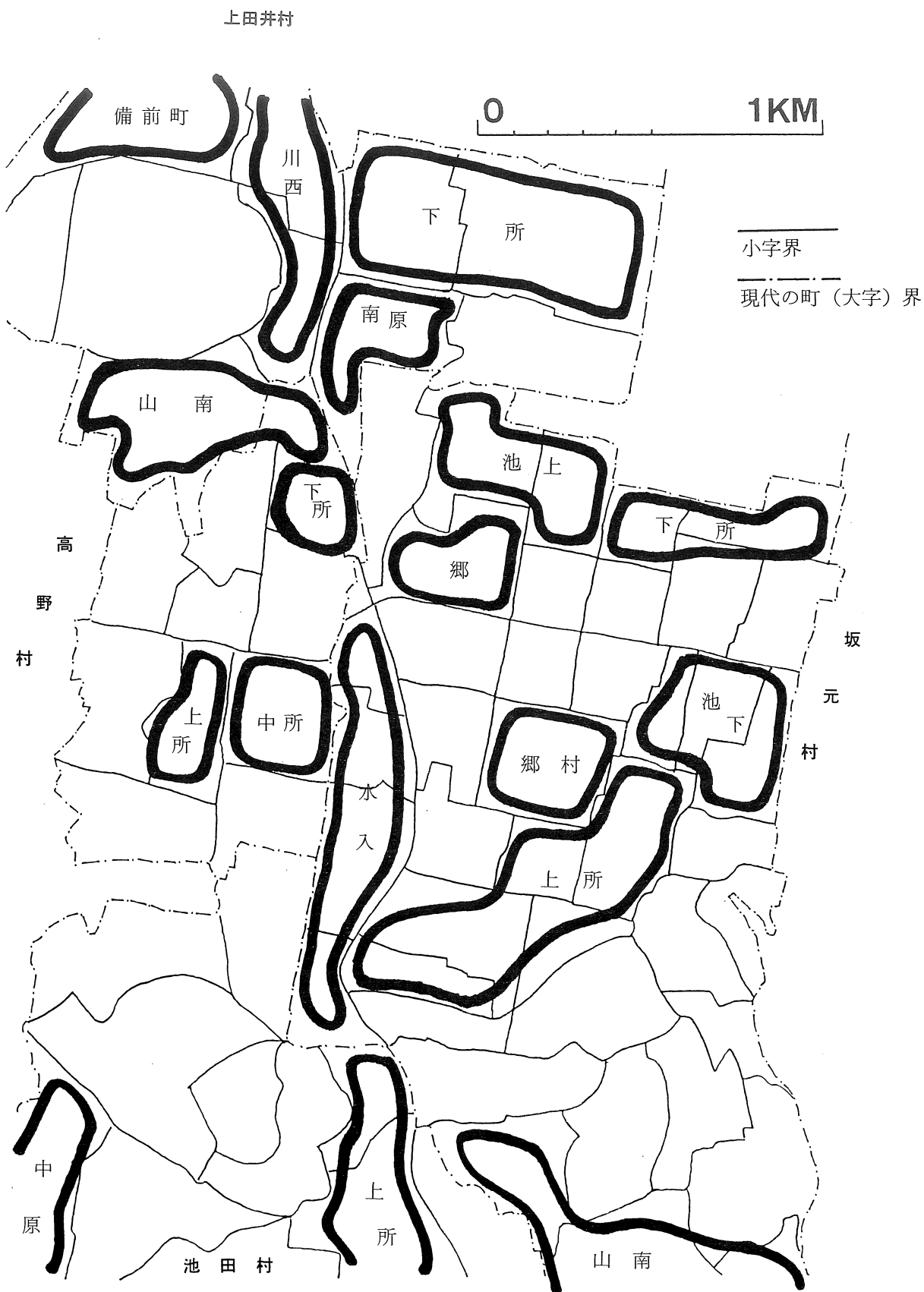
郷村免では小地名「宗友」が小字名「峯友」として伝えられる。一方、免名「郷村」に似た地名は残っていない（「郷」とは、とりあえず別と考える）。

郷免では「郷」が小字名・自治会名・メンバ名に残り、それらの範囲は多少のズレがあるものの、ほぼ同定できよう。なお小地名「横手」は伝わらない。

水入免では「水入」が残らないが、小地名「川島」「川西」が小字名・自治会名・メンバ名に伝えられ、小地名「徳条」も小字「徳條」として残る。

下所免では「下所」が小字「東下所」「西下所」として残る。一方、小地名「大角」が小字「東大角」「西大角」、自治会名・メンバ名「大角」として伝えられる。これらは、ほぼ同じ範囲である。

以上の作業および、昭和20年の集落の位置関係・“小字”を考慮に入れば、坂元村の免場の範囲



第33図 近世後期の免の分布

(近世後期)は第33図(右下)のように復原できる。

b 高野村

岡田免では免名・4小地名ともに伝わらない。

上所免では小地名「前さこ」が小字「前浴」として残る。免名「上所」・小地名「早神」は伝わらない。

中所免では小地名「流田」が小地名として残る。ただし免名は伝わらない。

下所免では小地名「切戸」が小地名として残る。(後述するが、上田井村の小地名「切戸」と隣接すると推定される)。

以上から高野村の免場の範囲(近世後期)は第33図(左中)のように復原できる。だが、この地区では「上所」「中所」「下所」という讃岐の伝統的な地名呼称が、近世に遡る可能性のある小字名に残っていない。自治会名は「高野上」「高野中」「高野下」であり、メンバ名は「高野南」「高野中」「高野下」である。昭和20年の集落名もこのメンバ名と同じである。

c 上田井村

中所免では小地名「南原」のみ小字地名として残る。

下所免では、免名は伝わらないが、小地名「大灘」「三十六」が小字名として残る。ただ小字名「由良」は春日川対岸の小字「由良山」・自治会「由良」と比定した場合、「大灘」「三十六」と「由良」は次に示す川西免を挟んで離れることになる。「由良」は下所免の飛び地と考えても良いが、小地名「由良」の位置については保留としたい。

川西免では免名「川西」が小字名に残り、小地名「川窪」も小字「川久保」として伝えられる。したがって春日川西岸の南北に長い地区と比定される。また昭和20年には“小字”「川久保」「川西」が「川久保」集落を構成していた。

備前町免では、免名・小地名「備前町」が小地名として伝えられ、“小字”名でもある。同じ昭和20年の集落「山北」は、“小字”「備前町」「山西(一部)」で構成されたことも参考になる。他の小地名「鎌倉」「禅門」は残らない。

山南免では免名「山南」と小地名「切戸」が字名で残る。ただし「切戸」は高野村の下所免に含まれる小地名とも共通するが、位置的に隣接するので問題はなかろう。小地名「溝川」は残っていない。

以上から上田井村の免場の範囲(近世後期)は、第33図(左上)のように復原できる。

#### 4 分布(領域)図の比較

作成・提示した5種類の分布図を、近世から現代まで時間軸に沿って並べてみよう。近世の状況を伝えるのが、第33図「近世後期の免」と第29図「小字」である。「小字」のほうは起源としては「免」より古いだろう。条里制を伝える「市ノ坪」がその代表例である。そして「小字」は、明治の地籍図作成に際して、網羅的に記録され現代に伝えられたので、近代以前の産物と考えて良い。ただし、第33図と第29図の前後関係は、判断できない。次に、第32図「メンバ」である。聞き取りの限りでは、現在のメンバは、少なくとも戦前のそれを、踏襲している。そして第31-2図「昭和20年頃の集落」、第30図「現在の自治会」という順になる。これら5図はいずれも住民の空間認識(分節)の反映であるが、地縁的な社会集団に対応した領域という点に限れば、第29図が除外される。これで第33図と第29図の前後関係は問題にならなくなる。残り4図を古い順に並べると、①図28(近世後期)→②図27(近代)→③図26-2(現代初期=昭和20年頃)→④図25(現代)となる。つまり本報告の分布図は、

ページを戻るにつれ近世から現代へと時間を遡るように並べてある。これら4枚の分布図はそれぞれのメルクマールが多少、異質かもしれないが、その時期ごとに、最も重要な地縁的結合を表現するものと考えれば、それらの比較はあながち無意味ではなかろう。ここでは、まず各領域単位の変化に注目してみたい。つまり、ほぼ同じ地点が、どのような地名で呼称され、どれほどの範囲をその領域としているかに着目するのである。さて、4枚の図に示される各領域は、大まかに次の4パターンで変化していることがわかる。

①ほぼ同じ領域を維持している（Aタイプ）

たとえば川島東町の大角地区が典型だろう。第33図（免）の各領域の広がりはやや不正確ではあるものの、近世後期に免として存在した領域は、多くの場合、ほぼ同じような広さで維持されている。大角地区のように同じ呼称（地名）で維持するケース（A1）や、呼称が変わるケース（A2）がある。後者は、川島東町の沖上→横張（東）、池下→横田、由良町の南原→横張西、備前町→山北、などがこれにあたる。いずれにせよAタイプが多いのは事実である。

②ほぼ同じ範囲が細分化し、単位となる領域が狭くなる（Bタイプ）

例えば春日川沿いの小字「川島」から南の地区は、坂元村水入免→川島町川島／畑／川西→川島東町川島下／川島中／川島西／川島上／畑ノ下／畑ノ上／川西、と細分化している。南北の春日川沿いの主要道と、東西の南海道（現・三木国分寺線）の交差するこの付近は近世以来、交通の要である。そのため、川島校区で最も人口が集中する地区となっている。この地区の地縁的な社会集団は、その規模を標準化するために分割されたものと考えられる。由良町の川西（川久保）が川久保1・2の自治会に分離したのも、同様の原則による最新の事例である。

③領域が移動する（Cタイプ）

例外的な現象のように思われる。坂元村上所免は第33図のような東北から南西方向に細長い領域であった。しかし近代になると、上所地区は、かつての郷村免の領域を取り込む。一方、上所免南部の片山地区は領域としては独立した。この結果、上所地区は北へ移動したことになる。この原因は不明である。

④新しい領域が成立するタイプ（Dタイプ）

川島東町の横内地区や南の丘陵部がこれに該当するかもしれない。しかし平野部では数少ないケースと考えられる。なぜなら、地区の平野部は、少なくとも近世前期には開発が終了し、散村形態の集落が成立している。新しい領域が登場する余地は、平野部にはほとんどあるまい。たとえば川島東町の高野中地区は一見、新しく成立した領域に思われる。高野村はかつて「上所・中所・下所」の3免で構成されていた。近代以降も「高野下・高野中・高野南」の3地区で構成される。これらを領域の位置関係で推測すれば、下所免が高野下地区に、中所・上所の2免が合併して高野上地区に成長したと考えられる。したがって高野中地区は近代に新しく成立した可能性はある。しかし、近世後期の岡田免の所在が不明であるので、岡田免が高野中地区になったことも否定できない。いずれにせよ、Dタイプは、平野部では数多くはない。

以上、各領域の変化にはこのA～Dのタイプが考えられるが、平野部ではAタイプが一般的であろう。周知のように、高松平野の開発、集落成立は非常に古く、しかも近世以降は散村の集落形態であった。したがって地縁的な社会集団は、時代をとおして散在居住していたと推測される。この各集団の規模、つまり集落ごとの人口・戸数は変化したにせよ、各集団・集落単位は常に存在・維持されていたと思われる。そのためAタイプが一般的となったのだろう。一例として最近の数字をあげれば、

たとえば川島東町の太田地区は、終戦当時の戸数が22戸で、平成6（1994）年には55戸と倍以上になっているが、自治会の分立は予定されていない。

この4種類の分布図を比較・検討すると、さらにムラの空間構成に関する特徴が分析できるが、今後の課題としておきたい。また、よりミクロなレベルでの検討は、調査を一部行っているものの、次の機会を期したい<sup>(7)</sup>。

（謝辞）本報告に関する調査では、東原茂則さん（松宇神社宮司）、高松市役所山田支所、および川島地区住民の方々にお世話になりました。お礼申し上げます。

#### 註

(1) 第1期の調査報告は、次にまとめられている。

高松市教育委員会編『讃岐国弘福寺領の調査』同、1992年

(2) 石原潤「集落形態と村落共同体：特に讃岐の事例を中心に」人文地理17-1 1965年

(3) 川島郷土誌編集委員会編『川島郷土誌』川島校区地域おこし事業推進委員会 1995年（以下、『郷土誌』と略）。なお、図26-1、表6は544・545頁。

(4) 『郷土誌』280頁

(5) 中原耕夫「讃岐の地神祭」瀬戸内海歴史民俗資料館年報4 1979年また拙稿「太田地区周辺の民俗調査：ムラの伝統的空間構成を中心に」前掲註(1)所収。なお、1995年3月18日に松宇神社の宮司さんが、地神祭で各メンバを回ったコースは、次のとおり。山南→上所→横内→大角→北下所→大荒→横張→郷→高野下→高野中→高野南→畑→川西→片山。このコースは先代の宮司のころも同じだったという。

(6) 石原潤は免場と免は整合しないことを強調するが、説得力に欠けるように思われる。前掲註(2) 52・53頁

(7) 「小字」よりもミクロなレベルの空間認識は、たとえば水田一筆ごとの民俗地名などに現れる。

以前、太田地区周辺で、この問題意識から聞き取り調査をしたときは、水路名に民俗地名が残っていたものの、水田・畑については収集できなかった。今回、川島校区の調査で、たとえば川島東町の免場「片山」において、「ミカンジ」「マエバ」「ウラタンボ」「イッポンマツ」などの民俗地名を収集することができた。